2020 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**地域資源を活かした小型信仰施設が都市化に適応する知恵** －京都白川石の地蔵を事例として－
キーワード	①京都の地蔵、②石仏の分布、③石材資源

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	チョウ　ヘイセイ 張　平星
配付時の所属先・職位等 （令和２年４月１日現在）	東京農業大学　地域環境科学部　助教
現在の所属先・職位等 （令和４年７月１日現在）	東京農業大学　地域環境科学部　助教
プロフィール	中国南京市出身。中国の東南大学建築学科を卒業した後、京都大学大学院に進学。造園石材を研究テーマとし、博士（農学）を取得。日本造園学会奨励賞、日本造園学会全国大会（平成 27～29 年度）ベストペーパー賞を受賞。2019 年度より現職に就き、日本庭園・造園材料・石材と文化について研究教育を行っている。

1. 研究の概要

近代以降、地域資源の代わりに規格化された工業製品の利用が激増し、住民の生活の利便性が大きく高まった一方、地域本来の性格が失われつつある。本研究は、京都の「お地蔵さん」と呼ばれる小型信仰施設（図1）の石材と配置場所を切口に、地域資源を活かし、地域の個性を継承できる現代都市の作り方について研究を行った。

図１　京都の「お地蔵さん」

2. 研究の動機、目的

京都では、庶民信仰として「お地蔵さん」と呼ばれる多くの石仏が道沿いに祭られている。これらの石仏には、鎌倉後期～室町時代の作と推定される小さな阿弥陀如来坐像が圧倒的に多く、比叡山延暦寺から広まった浄土信仰に関連する可能性が指摘されている。近代以降の都市開発では、これらの石仏は移設や撤去されることが多いが、他の地域に比べて「お地蔵さん」の密度が高く、街角・川沿い・壁や生垣の中など、都市の隙間に多く保存され、京都特有の景観を継承している。また、これらの石仏の材料について、「花崗岩製」との報告があるが、石材の産地が把握されていない。一方で、京都の比叡山南部の花崗岩地帯から産出する「白川石」は、鎌倉時代から石造物製作の有名な石材として使われていたため、京都の石仏はこの石材に深く関連する可能性が高いと推測した。

そこで本研究は、a）京都の「お地蔵さん」の石仏は白川石で製作されたのか、そうでない石仏はどこの石材で作られ、どこに分布しているのか、b）これらの石仏はどこに配置され、信仰施設としてどのように地域の構造を作り上げたのか、の２点の解明を目指した。

3. 研究の結果

COVID-19 の感染拡大により、現地調査をしばらく実施できなかったものの、2020 年度の夏

から現地調査を本格的に始め、京都市左京区の南禅寺から大原までの 15 エリアにおいて、歩行と自転車の併用により、すべての道について現地踏査し、石仏の位置と周辺状況を記録した。

その結果、360 ヶ所・1900 体以上の石仏が確認された。肉眼の判別と帯磁率（岩石の生まれつきの磁性の強さ）の計測により、これらの石仏は、90 体を除き、すべてが白川石で作られたものと判明した（図 2）。他の石材で作られた 90 体の石仏は 68 ヶ所に散在していた。これらの石仏の石材は、現代に灰砂岩の機械彫りで作られたもののほか、京都三山の砂岩・チャート・花崗閃緑岩で作られたものが認められた。以上のこのことから、京都の石仏の石材は白川石が主流であったといえる。また、京都の「お地蔵さん」に存在するこの「白川石文化圏」は、京都盆地全体に広まっている可能性が高い。

次に、これらの石仏の配置場所を分析した結果、①旧街道沿い、②集落内の道の分岐や屈折部、③寺社や公民館などの公共施設の入口、④川・橋・水路の傍ら、⑤水田、田んぼの畦道や山林との境界、に分類でき、パブリックな通行空間とプライベートな生活空間の境界や、災害が起こりやすい混沌な自然と人間の作った秩序な空間の境界、地域内の公共施設と公共空間をマークしていることが確認された。これらの石仏の配置場所を明治 42 年測図の地形図と照合すると、明治後期の居住域の境界や居住域内、旧街道沿いにあるものが 8 割以上であった。都市開発が進み、地域景観が消失しているものの、「お地蔵さん」の石仏は地域の構造を読み解くための有効な要素といえる。

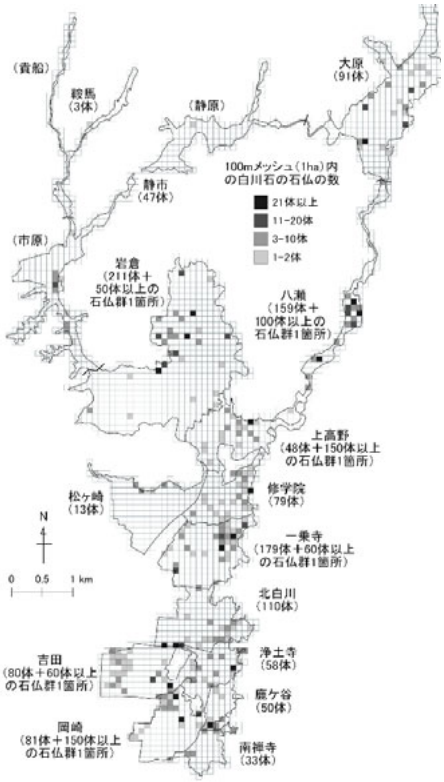

図 2　白川石の石仏の分布状況

図 3　2022 日本造園学会発表

石材資源を簡単に輸入でき、生活基盤が大幅に改善され、信仰施設としての需要が希薄になっている今、京都の「お地蔵さん」の石仏から地域の個性を持った現代の都市づくりの知恵を読み取れると考えられる。詳細な研究成果は、以下 2 本の論文として公表した（図 3）。①張平星（2021）「京都市左京区山麓部の石仏の分布と石材利用」ランドスケープ研究 84(5)、517-520。②張平星（2022）「石仏の安置場所からみる京都の若狭街道沿いの集落と道の関係性」ランドスケープ研究 85(5)、613-618。

4. 研究者としてのこれからの展望

私の研究テーマの一つは、「石材の文化」です。恐竜と同じ時代を過ごした岩石は、人間によって信仰され、石造物に加工され、庭園の造景に使われ、今までにない輝きを放ち、そして自然に還ります。数千万年前の壮大な地質変動から生まれた岩石は、数千年の歴史しかない人類の文明によってどのように使われるのか、に着目して研究を展開していきます。これからの研究では、私が所属している造園学分野のみならず、岩石学・地質学・人文地理学・哲学など多岐に渡る知識と技術が必要になるため、今後も他分野の研究者との交流や連携を図りたいと思います。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

医理工系の研究課題が多い中、本課題を採択いただき、誠にありがとうございます。地道なフィールド調査が主となるため、京都往復の旅費の支援がなければ本研究は成り立ちません。私の出身地にない信仰の形ですので、8 月の京都の炎天下の中、滝のような汗を流していましたが、予想外なところで石仏を見つけた時の喜びが鮮明に残っています。2 年間の調査で京都全域の石仏を把握することができませんでしたが、微力ながら京都の「お地蔵さん」の保存と発信、そして現代の都市づくりに貢献できれば幸いに存じます。